



TOHOKU
UNIVERSITY

東北大学大学院 国際文化研究科



GSICS
TOHOKU UNIVERSITY

GLOBE

<https://www.intcul.tohoku.ac.jp>

国際文化研究科 広報

No. 39

Oct 2026

Contents

02 研究科長メッセージ

03 新ウェブサイトの紹介

04 国際卓越関係(URA)

長谷部 里花 特任助教(運営)

06 研究プロジェクト

内原 卓海 准教授

常本 亜希 准教授

真家 峻 講師

09 新任教員紹介

岩渕 俊樹 准教授

エガス・モニス＝バンデイル 准教授

ヤニス・ガイタニディス 准教授

吉原 将大 准教授

矢島 真澄美 講師

崔 海寧 助教

12 退職者と新刊紹介

佐藤 雪野 准教授

13 修了者からのメッセージ

何 敏 さん

山口 陽子 さん

14 科研費採択報告

16 INFORMATION

○キャリア講習会

○公開講座

○入試説明会

○入試日程

研究科長メッセージ



地球規模課題の解決に貢献する 国際文化研究科を目指して

国際文化研究科長 劉 庭秀

近年、世界各地では、記録的な高温や豪雨、洪水、森林火災などの異常気象や自然災害が相次いでいます。また、戦争や地域紛争が絶えることなく、国際社会における分断や対立も一層深刻になっています。地球温暖化、海洋汚染、資源循環をはじめとする地球環境問題、複雑化する国際関係、多様な言語や文化を理解し尊重し合う多文化共生社会への転換、さらには急速に進む少子高齢化への対応など、私たちが向き合うべき課題は、相互に関連しながら複雑さを増しています。

国際文化研究科は、これまでも文化、言語、歴史、政治、経済、社会、環境などの幅広い領域を対象として、こうした地球規模課題に取り組む多様な教育・研究プロジェクトを展開してきました。本研究科の大きな特色は、個別の専門分野にとどまることなく、学際的・分野横断的、さらには文理融合的な視点から、現代社会が抱える諸課題の本質を明らかにし、その解決に向けた道筋を探究している点にあります。

東北大学は、2024年12月、日本で初めて「国際卓越研究大学」に認定されました。世界最高水準の研究成果を創出するとともに、その成果を広く社会に還元し、国際社会の発展に貢献するため、国内外における教育・研究活動を一層強化しています。本研究科も、国際卓越研究大学を構成する独立研究科にふさわしい成果を生み出すことを目指し、この2年間、組織基盤の強化と研究力の向上に重点的に取り組んでまいりました。

特にこの1年間は、教育支援および業務支援を担う人材の拡充、研究科専任URAの採用、国際卓越研究者の採用などを進め、教員が教育・研究活動に一層専念できる環境の整備に努めてきました。また、世界トップレベルの研究者との国際共同研究、国内外の民間企業との産学連携、優れた研究成果の国際的な発信を積極的に推進してきました。

その結果、国際学術誌に掲載される研究論文数が増加しただけでなく、世界的に高く評価されるTop 10%論文や論文の被引用数も大幅に増加しています。さらに、民間企業との共同研究や受託研究、公的機関を含む外部研究資金の獲得実績も着実に伸びています。こうした研究力の向上は、研究科全体の基盤強化を促し、教育・研究・社会連携が相互に発展する好循環を生み出しつつあります。

教育面においても、学生の定員充足率は大きく改善しました。近年は、世界のさまざまな国や地域から、異なる国籍、言語、文化的背景を持つ留学生が集まるとともに、日本人学生や社会人学生の入学も増え始めています。多様な学生と教職員が日常的に交流し、互いの価値観や専門性を尊重しながら学び合う環境そのものが、本研究科にとって重要な教育的資源となっています。

国際文化研究科は、従来の枠組みにとどまる伝統的な文系部局ではありません。人文科学、社会科学、言語科学、持続可能性科学などの多様な研究領域を有機的に結び付け、国際卓越研究大学における「総合文系」の役割を担う研究科です。異なる専門分野を横断し、多様な文化的背景を持つ人々が協働することによってこそ、複雑な地球規模課題に対する新たな知見と解決策を生み出すことができると考えています。

今後も、学生と教職員が力を合わせ、それぞれの専門性と文化的背景を尊重しながら、文化、言語、歴史、政治、経済、社会、環境などに関わる地球規模課題の解決に貢献してまいります。そして、世界に開かれた教育・研究拠点として、国際文化研究科がさらに着実に発展していけるよう、不斷の努力を重ねてまいります。

皆様には、今後とも本研究科の教育・研究活動に対し、変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



研究科ウェブサイトのリニューアル

2026年4月、本研究科では広報戦略の再構築の一環として、ウェブサイトの全面的なリニューアルを実施しました。今回のリニューアルは、単なるデザインの刷新ではなく、受験生、研究者、企業・自治体、公的機関、海外関係機関など、多様なステークホルダーに対して研究科の教育・研究活動の魅力を効果的に発信するための情報基盤を整備することを目的としています。

本研究科を志望する受験生にとって必要な情報にアクセスしやすいサイト構成を目指し、入試情報をトップページにもってくるだけでなく、教員紹介ページについても情報の整理・充実を図りました。また、研究科の特色や研究内容が分かりやすく伝わるよう、全講座の研究紹介をバランスよく掲載しました。今後は、若手研究者、女性研究者、外国人研究者の活躍についても積極的に紹介し、本研究科で行われている多様な教育・研究活動をより身近に感じてもらえる情報発信を進めていく予定です。

情報発信機能については、「ニュース」「受賞・表彰」「イベント」「研究成果」「社会連携」等の新着情報を充実させるとともに、「産学連携共同研究プロジェクト」や「研究プロジェクト」に関する情報を新たに整理・掲載しました。これにより、本研究科が取り組む教育・研究活動および社会貢献活動を、学内外に向けてより継続的かつわかりやすく発信できる体制を整備しました。

さらに、国際卓越研究大学にふさわしい研究情報の発信を目指し、公開可能な研究成果（論文等）の掲載も進めています。また、公的機関や国際機関、JICA等の関係機関への情報発信も意識し、研究科の国際性や社会的貢献が伝わる構成としています。

今回のウェブサイトのリニューアルを契機として、本研究科では広報活動そのものをさらに強化し、SNSを活用した情報発信も開始しました。現在、FacebookおよびInstagramに公式アカウントを開設しており、研究科のニュースやイベント、研究成果など、ウェブサイトとは異なる形で日常的な情報を発信しています。Xについても公式アカウントの開設を予定しており、準備が整い次第、情報発信の媒体をさらに広げていく予定です。

ウェブサイトとSNSを相互に活用することで、本研究科の教育・研究活動をこれまで以上に幅広い層に知っていただき、学生募集、研究交流、社会連携、国際交流のさらなる促進につなげていきたいと考えています。今後も、研究科の活動や成果を積極的に発信し、本研究科の魅力を広く社会に伝える広報活動を継続してまいります。

リニューアルにご協力いただいた教職員、関係業者の皆さまに感謝申し上げます。

（江藤 裕之 広報・公開講座委員長）



国際卓越関係 (URA)

国際卓越研究大学に求められる見える化とは



特任助教(運営) 長谷部 里花

東北大学の新しいロゴマーク「UREX1」をご存じですか？

ユーレックス・ワン。Japan's First University for International Research Excellenceの略語で、「国際卓越研究大学第1号」を指します。UREXはすでに医薬品での商標登録がされており、「1」を付けくわえたとか。国際卓越研究大学の英語版ウェブページをみると、「UREX-Tohoku」の愛称も使われているようです。

日本の知的インフラを担うトップランナーは、KYOTOやTOKYOではなくTOHOKUだ。世界に向けて、そんな自負を込めたメッセージなのでしょう。

国際卓越研究大学とは、2022年に施行された法律に基づき、日本の大学の研究力向上を図ろうという「国策」です。10兆円ファンドの運用益をもとに、認定校に対し、長期的かつ安定的に財政面で支援する。破格の待遇でトップ研究者を集め、そのもとで次世代の研究者を育て、世界と伍する研究拠点にしてゆく。そんなスキームです。

卓越大学の制度には、変革を支える人材の配置も盛り込まれました。私が担う「URA」の業務も、支援人材として位置づけられています。

URAはUniversity Research Administratorの略。直訳すれば「大学研究の運営・管理人材」でしょうか。ただ、私のミッションは単なる運営・管理とは少し違います。管理を担う事務系職員と研究を担う教員との間で、空白領域を探り扉をこじ開けていく活動、といえるかもしれません。

2025年10月の着任後、私は主に国際ジャーナル論文の商業文献データベースを活用し、国際文化研究科の研究力分析に取り組んできました。卓越大学に課せられた目標の達成度を可視化し、さらなる研究環境の向上のために大学本部と折衝する。そのための任務と考えています。

ではなぜ、研究業績の「見える化」が必要か。

大学研究者の中には、抵抗を感じる方が多いことも承知しています。「知の探求は営利主義とは違う」「費用対効果では測れない」「学問の自由が脅かされるのではないか」……。

私は長年、民間企業で海外プロジェクトの業務に携わってきました。ビジネスの現場は常に数字がついてきます。結果が見えない事業には投資はできません。そういう世界から身を転じてみると、大学はもっと説明責任を果たすべきではないかと思います。加

えて卓越大学には、国民の税金が集中投入されている。大学が生み出す「知」の質と量を、説得力のあるデータで示すことで、研究者の価値がより高まるのではないのでしょうか。

人文・社会科学分野の研究評価は、言語の障壁や地域研究の特性から、国際的な論文指標だけでは測れないとも言われます。こうした懸念を踏まえ、文部科学省では、書籍を含めた多様な成果発表媒体の評価方法について、議論を進めています。人文系の学術書は一般の人が読むことも多く、社会的インパクトをとらえることも必要です。今はその研究のすごさが可視化されていなくても、数十年先の世界や社会を見据えて、研究の将来的な価値を見定める。そうした評価手法の開発も、期待されています。

業績の「見える化」は、研究者にとっては「見せる化」とも言えます。

私のような門外漢にも、研究者のみさんの研究内容はそれぞれ興味深い。多様な研究分野について、発信方法の工夫の余地はまだまだありそうです。

日本の政策決定は近年、大学政策のみならず、エビデンスに基づいて客観的に行われること(EBPM)が重視されています。国際的にも、巨大プラットフォームが人や物、資金の流れに大きな影響を与えるようになり、その基盤になっているのは、膨大な「データ」であり、進化の著しいAIです。

アカデミアも、こうした地殻変動と無縁ではありえない。2つのサイエンスの「波」が研究環境を大きく変えようとしています。

1つはOpen Scienceの波です。研究の再現性の担保がより求められ、公共財としてデータを利活用することによって、研究をさらに発展させてゆく。

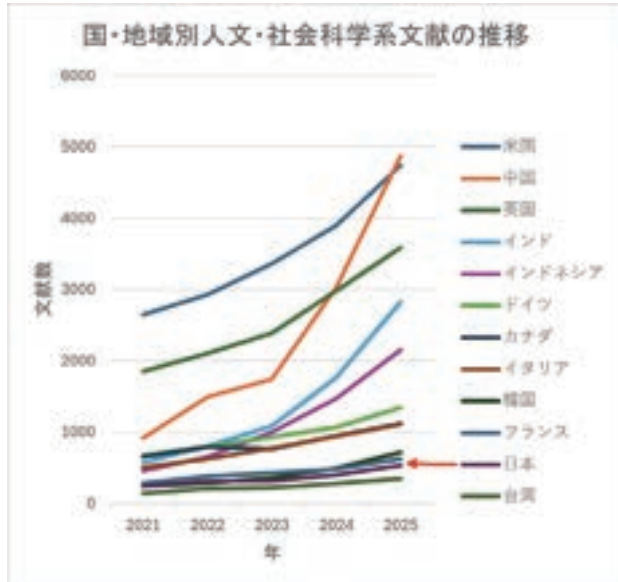
2つ目がAI for Scienceです。オープンサイエンスによって得られた信頼できるデータを資源に、AI駆動型の研究を創出させる。研究者の間ではまだ個人差があるようですが、AIを従来の研究手法と併用し、新しい知見を得てゆくフェーズに入ったのは、確実だと思えます。

大学が日々蓄積する「知」の「見える化」を武器に、時代の荒波の中をうってでてゆく。国際卓越研究大学はその牽引役を期待されています。

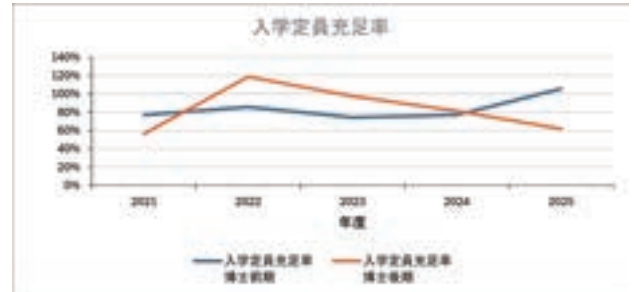
微力ながらURA(ウラ)方として、研究者の皆さんを支えていきます。

現状と課題

1. Scopus/SciValに基づく結果 (2026年7月6日時点)
- 1.1. 日本の文献数伸び悩む一方、中国やGサウスが台頭
分野: Arts and Humanities, Social Science



2. 研究科のデータに基づく分析結果
- 2.1. 博士後期課程の学生確保が課題

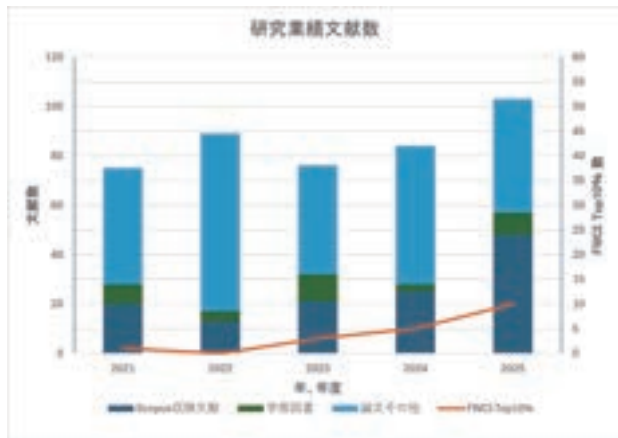


- 2.2 博士後期課程の論文数では成果



1.2. 研究科の現状

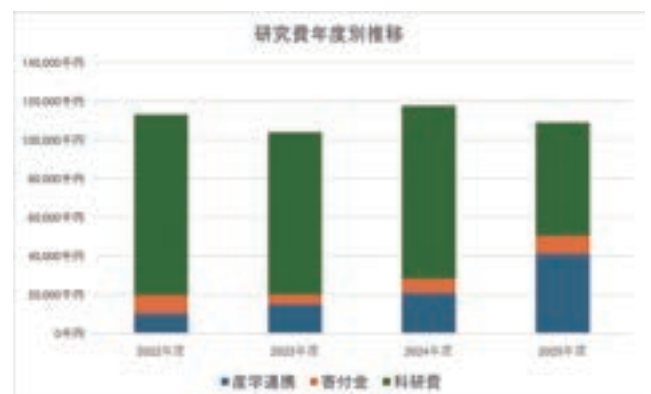
- (1) 国際ジャーナル公開数とFWCI Top10%以上の論文数増



- (2) 研究成果の国際的インパクトが向上



- 2.3. 産学連携による外部資金獲得は順調、科研費の資金獲得に課題



研究プロジェクト

■ 東北大学を世界の応用言語学の研究拠点に！ —応用言語学の現在と未来を若手研究者に聞く—

国際文化研究科の三つの柱の一つである言語総合研究系は、言語そのものの仕組みを探究する言語科学研究講座と、その知見を教育や社会へとつなげる応用言語研究講座で構成されている。とりわけ応用言語学・第二言語習得研究は、本研究科が国際的にも高い評価を受けている研究分野の一つであり、多くの優れた研究成果を世界へ発信している。

東北大学は、2024年11月に日本初の「国際卓越研究大学」に正式認定され、研究大学としてのさらなる役割が期待されている。その中で、応用言語研究チームでは学生やポスドク研究員を含めて、様々な国際共同研究・分野横断研究を行っている。その構成員は、第二言語習得研究・応用認知研究（脳機能イメージングアプローチ）を専門とする、鄭嬌婷（教授）、内原卓海（国際卓越准教授）、常本亜希（准教授）、真家峻（講師）、崔海寧（助教）、小室竜也（学振PD）であり、またUniversity College Londonからはアフィリエイト・プロフェッサー（国際卓越教授）として斉藤一弥教授を、また、GSICSフェローとして鈴木田優衣氏をお迎えしている。

では、応用言語学とはどのような学問なのか。そして、その最前線ではどのような研究が進められているのか。今回は、応用言語研究チームの中から、この三年の間に着任された若手の専任教員の内原卓海先生、常本亜希先生、真家峻先生にお願いし、研究との出会い、現在取り組んでいるテーマ、そして応用言語学の未来について話を伺った。



内原 卓海先生



真家 峻先生



常本 亜希先生

■ 応用言語学とは？

司会 まず、応用言語学（Applied Linguistics）とはどのような学問なのか簡単に教えてください。

内原 ひとことで言えば、言語学の知見を実社会へ応用する学問です。私自身は、とくに外国語教育や言語指導の現場で役立つ研究を行っています。理論を明らかにするだけでなく、それを教育へどう生かすかを考えることが応用言語学の大きな役割だと思います。

常本 教育の他にも、医療や法律、言語テスト、さらには移民政策のような社会制度まで、言語に関わる課題はさまざまな場面に存在します。そうした課題を「ことば」の視点から分析し、解決に結び付けていくことも応用言語学の重要な役割です。

真家 応用言語学には広い意味と狭い意味があります。狭い意味では外国語教育（Foreign Language Education: FLE）や第二言語習得研究（Second Language Acquisition: SLA）を指すことが多いのですが、広い意味では、言語学で得られた知見を社会に生かすあらゆる研究を含みます。実際、海外でも学術誌と専門書では扱う範囲が少し異なり、この学問の広がりを見せています。

司会 一般には応用言語学と聞くと外国語教育を思い浮かべる人が多いかもしれませんが、しかし、お話を伺うと、その本質は「ことば」を通して社会のさまざまな課題に向き合う学問であり、外国語教育はその中心的な分野のひとつであることがよく分かります。

■ 研究の出発点は、自らの学びの経験

司会 先生方がこの研究分野に進まれた背景には、ご自身の外国語学習の経験も影響しているのでしょうか。

内原 そうですね。自分自身が苦手だと感じていたことが、そのまま研究テーマにつながっています。私は語彙が豊富ではないと言われることが多く、「なぜ知っている単語が使えないのだろう」と考えるようになりました。その疑問が現在の研究の原点になっています。

真家 私はもともと英語教員になりたいという思いがありました。留学中、「次はこの表現を使ってみよう」「この単語を実際に使えるようになりたい」と試行錯誤する過程がとても面白かったです。その経験から、人はどのような練習を通して言語を身につけるのかを理論的に研究したいと思うようになりました。

常本 私の場合は、自分の英語の発音への疑問が出発点でした。「なぜ自分の発音は他の人と違うのだろう」と考えたことから、幼少期の言語習得に関心を持ちました。その後、中高一貫校で英語を教える中で、「スピーキングはどのように指導すればよいのか」「発音はどのように評価すべきなのか」という新たな疑問が生まれ、現在の研究へと発展していきました。

司会 ご自身の学習や教育の経験が、そのまま研究課題へと結び付いているんですね。

真家 応用言語学には、そのような研究者が多いと思います。自分自身が抱いた疑問が、より多くの学習者や教育現場に共通する課題であることに気づき、研究へ発展していくケースが少なくありません。

「知っている語彙」から「使える語彙」

司会 現在取り組まれている研究について教えてください。

内原 私の研究テーマは、「使える語彙」という新しい概念を提案することです。従来の語彙学習では、「知っている単語」を増やすことに重点が置かれてきました。しかし、単語を知っていても、実際の会話で適切に使えなければ十分とは言えません。例えば、言いたい言葉がとっさに出てこなかったり、場面にふさわしくない表現を使ってしまったりすることがあります。私は、語彙とは単に意味を知っているだけではなく、「必要な場面で適切に使えること」まで含めて考えるべきだと考えています。

研究の出発点になったのは、電車の中で単語帳を片手に一生懸命暗記

している学生の姿でした。努力して多くの単語を覚えても、「実際には使えない」という声を耳にすることは少なくありません。それならば、暗記中心の語彙学習そのものを見直す必要があるのではないかと考えたことが現在の研究につながっています。

真家 このテーマは、国際的にも大きな注目を集めています。現在、第二言語習得研究のトップジャーナルの一つで特集号が企画されており、内原先生と私もゲストエディターとして参加しています。「使える語彙」という新しい考え方を世界へ発信する重要な機会になると期待しています。

発音研究が問いかけるもの——「話し手」だけではないコミュニケーション

司会 常本先生は、発音研究に取り組まれています。現在の研究について教えてください。

常本 私が関心をもっているのは、「発音がよい」とはどういうことなのか、という根本的な問いです。英語学習者の中には、「発音が悪いから話したくない」と感じる人が少なくありません。しかし、それは本当に発音だけの問題なのでしょうか。本人がそう感じているだけで、聞き手は必ずしも同じように受け止めているとは限りません。

そこで私は、「発音が向上する」とは何を意味するのか、さらに、コミュ

ニケーションの成否は話し手だけで決まるのか、という点に着目しています。従来は、発音の改善は話し手の努力によるものと考えられてきました。しかし、聞き手が多様な発音に慣れ、適切に理解する力を身に付けければ、コミュニケーションはより円滑になる可能性があります。

発音研究は、「正しい発音」を追求するだけではありません。人と人とのコミュニケーションを支える条件そのものを明らかにする研究でもあるのです。

研究の喜びは、人の成長に立ち会うこと

司会 研究者になってよかったと感じる瞬間は、どのようなときでしょうか。

内原 最近、強く感じるの、人は本当に成長するのだということです。学生は最初、プレゼンテーションや論文執筆に苦労します。しかし、数年間研究を続けるうちに、見違えるほど成長していきます。その変化を間近で見ることができるのは、研究者としてだけでなく、教育者としても大きな喜びです。

司会 研究成果だけではなく、人を育てることに大きなやりがいがあるのですね。

内原 そう思います。大学の研究は論文を書くことだけではありません。学生とともに考え、ともに成長していくことも、私たちの大切な仕事だと思っています。

一人ではできない研究だからこそ

司会 今後、本研究科の研究をどのように発展させていきたいとお考えですか。

内原 私は、自分一人ですべての研究を続けるだけなら、ここへ来る意味はなかったと思っています。本研究科には、自分にはない専門性をもつ先生方がいます。その知識を持ち寄り、学生も加わって一緒に新しい研究を創り上げていくからこそ、この環境の魅力です。

現在は脳科学との共同研究にも取り組んでいます。脳機能計測を応用言語学にどのように取り入れられるのかを模索しながら、少しずつ成果も生まれています。

真家 応用言語学は、文法だけを扱う時代から、語彙、発音、スピーキン

グ評価、学習者心理へと研究領域を広げてきました。だからこそ、異なる専門分野の研究者が協力することで、新しい発見が生まれます。私自身は、「練習」を軸にしたスキル習得理論をさらに発展させたいと考えています。同時に、学習者がどのような心理状態で学び、どのような支援が効果的なのかという研究も、今後ますます重要になるでしょう。

常本 本研究科には、日常的にさまざまな研究発表やゼミ、国内外の研究者による講演があります。そうした環境の中で、異なる専門分野が出会い、新しい研究プロジェクトが生まれていく。そのような「研究のハブ」であり続けてほしいと思っています。大学の外との共同研究もさらに進めながら、新しい研究を社会へ発信していきたいですね。

東北大学から世界へ

真家 私は博士課程をアメリカのミシガン州立大学で学びました。当時、応用言語学を学ぶなら世界の中心の一つがそこだったからです。今度は、そのような存在を東北大学で実現したいと思っています。「応用言語学を学ぶなら東北大学へ」——世界中の学生や研究者がそう考える研究拠点

を築くことが、私の目標です。

内原 日本国内では、すでに高い評価をいただいていると思います。日本一といってもよいでしょう(笑)。でも、それに満足することなく、世界へ向けて研究成果を発信し続けることが重要だと思います。

若い研究者へのメッセージ

司会 最後に、言語研究に関心をもつ学生や若い研究者へメッセージをお願いします。

内原 この分野は、努力を裏切らない学問だと思っています。積み重ねた努力は必ず自分の力になります。最後まで諦めず、自分の研究を信じて取り組んでほしいと思います。

常本 多くの人は、自分自身の学習経験や教育経験の中で、「なぜだろう」と感じた疑問から研究を始めます。その疑問を大切にしてください。興

味を追究していけば、それが誰かの役に立つ研究につながる可能性があります。応用言語学は、そのような出発点を大切に作る学問です。

真家 私は学生によく、「私を見てください」と話しています。特別な才能があったから研究者になれたわけではありません。努力を積み重ねれば、誰でも研究者になれる可能性があります。だからこそ、自分の可能性を信じて挑戦してほしいと思います。

おわりに

今回、三人の研究者からお話をきいて、そこに共通していたのは、「自分自身が抱いた疑問」から研究を始め、その成果を社会へ還元したいという強い思いであった。研究とは、答えを知っている人が進めるものではない。問いをもち続ける人が、新しい知を生み出していく営みなのである。そして、その問いの先には、人を理解し、社会をよりよくするための新たな可能性が広がっている。

東北大学国際文化研究科の応用言語学研究・第二言語習得(SLA)は、まさにその最前線に立ち、世界へ向けて新しい知を発信し続けている。

(司会：江藤裕之 広報・公開講座委員長)



「勝負の神」を祭る
秋保神社にて



○言語科学研究講座・真家峻講師の共同研究論文が The 2025 Albert Valdman Award を受賞しました

言語科学研究講座の真家峻講師が共同執筆した論文“Testing the three-stage model of second language skill acquisition”(Studies in Second Language Acquisition, 47(2), 617-649)が、The 2025 Albert Valdman Awardを受賞しました。

本賞は、Studies in Second Language Acquisitionに掲載された論文の中から、その年で最も優れた論文に授与される名誉ある賞です。同誌は第二言語習得研究および応用言語学分野のTop 10%ジャーナルであり、Google Scholar「Language & Linguistics」分野で2024・2025年に1位に位置づけられています。また、Albert Valdman Awardは第二言語習得研究領域において最も著名な論文賞の一つとして広く認知されており、今回の受賞は本研究科にとっても大きな成果となります。



真家先生と共著者のDr.Aline Godfroid

○国際共同研究を育む研究コミュニティ「J-SLARF@Tohoku」を2年連続で開催しました

本研究科(言語脳認知総合科学研究センター)と加齢医学研究所(応用認知神経科学センター)は、第二言語習得研究者コミュニティ「Japan Second Language Research Forum(J-SLARF)」によるシンポジウム「J-SLARF@Tohoku」を、2024年・2025年度の2年連続で共催しました。

J-SLARFは、国際共同研究や国際誌での研究発信を目指す研究者有志によって2017年に設立され、来年で10周年を迎えます。国内外の研究者が所属や専門分野を越えて交流し、新たな共同研究や若手研究者の育成につながる研究コミュニティとして発展を続けています。

2024年度は関西大学の新谷奈津子教授とミシガン州立大学のAline Godfroid教授を基調講演に迎え、ほか計7名の研究者が講演、約86名が参加しました。MRI実験見学ツアーも実施され、言語研究と認知神経科学を結ぶ東北大学ならではの研究環境を体験する機会となりました。2025年度はコンコーディア大学のPavel Trofimovich教授、ウェスタン大学のStuart Webb教授による基調講演、計8名の研究者による研究発表に加え、学生口頭発表3件、学生ポスター発表20件を実施し、国内外から約113名が参加しました。2日間を通して学生を中心とした活発な議論が展開され、次世代研究者の育成に向けたコミュニティの熱意が感じられる場となりました。

本シンポジウムは、最新の研究成果を共有するだけでなく、第二言語習得研究と言語テストや認知神経科学などを融合した学際的な研究交流を促進し、新たな共同研究の創出につながる機会となりました。また、国内外の研究者や学生に東北大学の研究環境を広く知っていただくことで、本研究科の国際的な研究力や教育環境を発信する貴重な機会となりました。



2024年度シンポジウム



2025年度シンポジウム



新任教員紹介



応用言語研究講座

准教授

岩渕 俊樹

2026年4月より応用言語研究講座に着任いたしました岩渕俊樹と申します。埼玉県出身で、大学・大学院時代を京都で過ごした後、埼玉、浜松での生活を経て、東北で暮らすのは今回が初めてとなります。これまでたびたび仙台を訪れる機会はありませんでしたが、実際に暮らし始めてから、日々新たな魅力を発見しています。

私の専門は実験心理学や認知神経科学です。これらの分野では、心理学的な行動実験や脳機能計測などの手法を用いて、「人の心がどのように働き、それをどのような脳の仕組みが支えているのか」の解明を目指しています。

なかでも私が強い関心を持っているのは、人間が言語を習得し、処理するメカニズムです。中学生で英語を学び始めて以来、「成長してから新しく言語を学ぶことは難しいのに、なぜ母語は自然と身につく、苦もなく使いこなせるのだろう」という疑問を抱き続けてきました。第一言語および第二言語の処理・習得に関わる心理学的・神経科学的なメカニズムを詳しく探るこ

とで、その答えに少しでも近づきたいと考え、日々の研究に取り組んでいます。

もうひとつの関心は、言語という一見普遍的な機能において、なぜ人によって大きな違いが生まれるのかという個人差の問題です。とりわけ、自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、限局性学習症などの神経発達症のある方々では、言語や認知をはじめとするさまざまな側面で顕著な多様性が見られます。こうした特徴を単に「障がい」という枠組みだけで捉えるのではなく、人類が持つ神経発達の多様性の表れとして理解することが重要ではないかと考えています。言語という窓からその仕組みにアプローチし、多様性が生まれるメカニズムを解明すべく、今後も研究に邁進してまいります。



国際政治経済論講座

准教授

エガス・モニス＝
バンデira

2026年3月に国際政治経済論講座に着任いたしましたエガス・モニス＝バンデiraと申します。出身はブラジルで、父はブラジル人、母はドイツ人です。十歳の頃にドイツへ引っ越しました。子供の頃から東アジアが大好きで、語学や歴史にも興味を持っていたため、中高生の頃からアジア史の本を読んだり、中国語や日本語の勉強を始めたりしました。

もともと外交官になることを志しておりました。大学では法学部に進み、司法修習を経て弁護士資格を取得し、博士号取得を目指して大学に戻ることを決めました。学部生時代に漢学の授業を数多く聴講していたこともあり、哲学部（日本の哲学科とは異なり人文系全般を包括する伝統的な学部区分です）の博士課程に進学し、その二年後、東北大学法学部の国際共同大学院博士課程コースに入りました。

専門は、法学の素養と歴史・政治・言語への関心を統合する分野として、法制史および政治思想史です。具体的には、清末から中華民国期にかけての憲法史に

ついて、グローバル・ヒストリーの手法を用いて研鑽を重ねており、日本、ロシア、トルコ、ペルシアとの関係、およびその内在的な歴史的連続性と断絶性に注目しています。そのほか、アジア思想史、特に近代アジアの人々の世界観や歴史解釈についても研究してきました。

博士課程を修了後、東北大学に着任予定でしたが、残念ながらコロナ禍のため来日が叶いませんでした。その代わりに、ドイツのマックス・プランク法史・法理論研究所及びエルランゲン大学に勤務しておりました。来日することは子供の頃からの夢でした。今年ようやくその夢を叶えることができ、感慨深く思っております。国際文化研究科の国際政治経済論講座にて、研究と教育活動を深めていけることを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。



新任教員紹介



日本宗教・思想史研究講座

准教授

ヤニス・
ガイタニディス

2026年4月に日本宗教・思想史研究講座に着任いたしました、ヤニス・ガイタニディス (Ioannis Gaitanidis) と申します。左の写真の奥に映っているのは、私の実家があるクレタ島の有名な遺跡、クノッス宮殿です。ミノア文明の象徴として歴史教科書に必ずといっていいほど載るクノッス宮殿の面白さは、その歴史的価値だけにあるのではなく、古代クレタ島の生活を想像した近代の考古学者たちが、クノッスをいかに「修復」してきたかというところにあります。そもそも宮殿ですらなかったかもしれない——今そう言われるクノッスの事例は、人間の想像や期待が、目の前の現実を塗り替える力を持つことを教えてください。私が研究している、宗教や医療の代替としてのスピリチュアリティ、そして宗教と消費の関係史においては、ものやサービスの価値と人間の価値観との境界線こそが、まさに想像の産物であると考えてきました。一見すると特殊にみえる宗教色の濃いセラピーや、「騙された」と思わせるようなサービスは、実は資本主義社会に生きる

私たちの価値観そのものを映し出す鏡なのです。

着任前は、イギリスのリーズ大学(英国国立日本研究所)で「日本研究」を学び、2011年に日本学の博士号を取得しました。その後、13年間、千葉大学に在籍し、国際日本学や国際教養教育に携わってまいりました。物事を分野横断的に捉える訓練を繰り返し積んできましたし、そうした教授法についての教科書も共編してきました。国際文化研究科は、地域・文化・言語を学際的に架橋する場であり、私自身の関心とも深く響き合うものだと思っています。想像力が現実を形づくるのだとすれば、ここ仙台から、皆さんとどんな世界を思い描いていけるのか。それを一緒に探っていけることを、心より楽しみにしております。



言語科学研究講座

准教授

吉原 将大

2026年4月より言語科学研究講座に着任いたしました、吉原将大(よしはら まさひろ)と申します。出身は埼玉県ですが、学生時代は東京、前任校では北海道と、日本の各地で暮らしてきました。実は以前にも東北大学にポスドクとして在籍していた時期があり、仙台に住んでいたこともあります。当時お世話になっていた方々をはじめ、皆様と再び一緒に働けることを大変嬉しく思っております。

専門は認知心理学で、特に「ヒトが言葉をどのように理解し、使用しているのか」という、心や脳のメカニズムに興味があります。私たちは日常的に本を読んだり会話をしたりと、大量の言葉を扱っています。これは多くの方にとって当たり前のことであり、普段は気にも留めないかもしれませんが、しかし、実は私たちが言葉を扱うとき、心(あるいは脳)という目に見えない世界では、極めて複雑で高度な処理が行われていると考えられています。

たとえば、「大」という一つの漢字に対して、私たちは

状況に応じて「だい(大吉)」、「おお(大型)」、「たい(大西洋)」と、複数の読み方を瞬時に、しかも適切に割り当てることができます。では、どうしてそのようなことが可能なのでしょう。このとき、心の中では何が起きているのでしょうか。

こうした疑問に取り組むため、特に日本語の認知や産出をテーマとしながら、心理実験によるアプローチで研究を進めてきました。今後は、言語や心という「目に見えない世界」を探求する面白さを皆様とも分かち合いながら、研究・教育に邁進してまいります。これから、どうぞよろしくお願いいたします。



新任教員紹介



多文化共生論研究講座

講師

矢島 真澄美

4月に東北大学大学院国際文化研究科に着任いたしました、矢島真澄美と申します。専門は、幕末から明治期を中心とする日本の視覚表象と異文化認識、写真メディアと文化表象です。本学では、学部生向けの全学教育英語科目を担当いたします。

古い写真に関心を持つようになったきっかけは、アメリカの美術館で目にした写真でした。それは幕末期の武士を写した衝撃的な写真で、歴史の出来事として聞いていたものが視覚資料として残されていることに驚き、写真が文化や歴史を伝える力を実感しました。その写真を撮影したのがフェリーチェ・ベアトであったことは、大学院で日本写真史を研究し始めてから知ることになります。

その後、カナダのカルガリー大学で写真を専攻し、北米先住民のドキュメンタリー撮影などを通して、写真を撮る側として、文化や歴史に関わる経験を得ました。帰国後は本研究科で、写真を通して文化や歴史を考察する研究へと関心を移していきました。在学中に

長崎大学附属図書館でステレオ写真と出会い、立体鏡をのぞくと、明治日本の街並みや人々の姿が眼前に浮かび上がることに、深く感銘を受けました。この経験が、ハーバート・ジョージ・ポンティングやベアトの写真表現における日本表象を研究する契機となりました。

博士号取得後は、大学英語教育に携わり、英語教育や異文化理解の授業を担当してきました。大学院生の頃に本誌に寄稿したことがありますが、教員として再びこの誌面でご挨拶できることを感慨深く思っています。今後は研究の原点に立ち返り、視覚文化研究を深めるとともに、大学英語教育の経験を全学教育の授業に活かしていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



応用言語研究講座

助教

崔 海寧

2025年10月に応用言語研究講座に着任いたしました、崔海寧(さい かいねい)と申します。といっても、初めて来る場所ではありません。国際文化研究科に来ることは、私にとって赴任というより、研究のしかたを学んだ場所へ「戻ってきた」という感覚に近いものです。2015年に研究生として入学し、2017年に修士号を、2021年に博士号を本研究科で取得しました。

現在、私が追いかけている問いが芽生えたのは、大学を卒業して国際学校で中国語を教えていた頃でした。言語を教えるとき、私たちは言葉そのものが担う以上のことを教えています。呼びかけの形、わずかな声の調子、話し手と聞き手の立場——そのどれもが、学習者に多くを語っています。こうした手がかりを聞き手がどう読み取り、そのとき脳で何が起きているのかを知りたく、大学院に進みました。学位取得後は本学の研究フェローを経て、2022年から2025年にはカナダのマギル大学 Neuropragmatics and Emotion Laboratory で博士研究員を務めました。

専門は、ことばを理解するときの脳のしくみ、特にことばと感情と対人関係が交わる場所です。行動実験とfMRI・脳波を用い、日本語の敬語や声の抑揚をどう処理しているのかを調べてきました。外国語なまりや話し手の年齢が、意味や感情の受け取り方をどう左右するのもも扱っています。今後は次の二つに取り組みます。社会的・感情的な文脈が理解にどう影響するのか。そして、それが一人ひとりの経験や認知の特性によってなぜ異なるのか。問いが芽生えた場所に戻ってきました。大変嬉しく思っております。地域も分野も異なる研究が集まる本研究科で、みなさまとお話しできることを楽しみにしております。



退職教員からの言葉



多文化共生論講座

准教授

佐藤 雪野

国際文化研究科と私

1999年に東北大学言語文化部にドイツ語担当として着任したが、2001年に言語文化部が廃止され、国際文化研究科に国際文化言語論専攻が新設された際に、国際文化研究科に所属することになった。以後、2026年に定年退職するまで研究科に所属したが、大学2年生の時に国際関係論を専門とし、前任校でも国際社会論(国際関係論)専攻に所属していたので、言語文化部の2年間の除いて、「国際」に関連した専門を全うできたことになる。また、その間、研究科では、改組に伴って所属講座が多言語文化社会論、多元文化論、多文化共生論と変わったが、一貫して、多文化を扱う講座に所属してきた。

私の学生時代からの専門は、多民族社会であったハプスブルク君主国や戦間期チェコスロヴァキアの歴史であったので、非常に収まりのよい所属に恵まれたことになる。また、言語文化部時代の公開講座をきっかけに、チェコのロマを研究対象とするようになり、ロマやユダヤ人などのマイノリティの歴史と現在に関する研究を進めたが、そのテーマも、多文化を扱う所属講座に

適合していた。

更に最近10年余りは、学内の研究プロジェクトから、ヨーロッパ難民危機以後のドイツの難民・移民政策を研究するようになった。新型コロナウイルス感染症の流行やウクライナ戦争などの影響を受けつつも、現地調査を含めた研究を遂行できた。

指導学生の研究テーマと私の研究テーマの関係については、チェコスロヴァキアやロマ・ユダヤ人を対象とした学生は少数派で、難民・移民問題や旧東側諸国に関連する研究テーマを扱うものが多数派だった。更に「多文化」という観点から、アニメやファッションを取り上げる学生もあり、新たなテーマを共に研究することは楽しみでもあった。

「国際」「多文化」の名にふさわしく、多くの留学生を指導する機会にも恵まれた。国際文化研究科で研究・教育に携わったことは、同僚、学生、事務方の皆様に恵まれ、私自身の研究テーマを深め、拡大することにもなり、大変感謝している。



新刊紹介

『魂と心のアルケオロジー:心身問題の新風景』

著者:佐藤 透(著)



不滅の魂や、身体とは別に心があるという考えは、なぜ生まれたのでしょうか。本書は、この根源的な問いを出発点に、各種の進化論の説明やタイラーの宗教人類学、カントの弁証論、宗教の認知科学(CSR)など、不滅の魂や心の起源をめぐるさまざまな学説を批判的に検討します。さらに、心には「冷暖自知」という言葉で表現されるような、他者には直接知ることのできない一人称的特性があることに着目し、それこそが心を身体とは異なるものとして捉える発想を生み出し、さらに不滅の魂という概念へと展開したことを論じます。この視点から心身問題を捉え直し、プラトンやアリストテレス、デカルト以来の議論を再検討するとともに、中性の一元論、心脳同一説、機能主義など現代の主要な立場を批判的に考察し、心の一人称的特性に立脚した心身関係の新しい見取り図を提示します。

『心の帝国:イギリス・フランス植民地帝国の過去と現在』

著者:ロバート・ギルデイ(著)、池田 亮(翻訳)、和田 萌(翻訳)



植民地帝国は、なぜ、そしていかに現代の英仏人の心の中で存続しているのか。本書は、フランス現代史を専門とする筆者が一般読者に問題提起した書籍である。通常の歴史書とは異なり、筆者の主な関心は帝国主義的な植民地拡大やその独立といった「公式の帝国」の盛衰ではない。むしろ、英仏がいかに移民による「逆からの植民地化」に晒され、勝利したはずの冷戦後にイスラーム主義に逆襲されたのか、またエスニシティとは無縁のはずの「グローバル金融帝国」の台頭が国内の排外主義と結びつくという逆説がなぜ生まれるのか、という点である。人々の心に棲む「帝国」という悪霊をいかにして眠らせるか。筆者によれば、植民地という「向こう側」での出来事と本国という「こちら側」での出来事の歴史的連関を考え、互いに理解に努めることにしか解決策は存在しない。周知の通り、日本も同じく植民地支配の経験を持つ。筆者の問いは、同じく日本人にも向けられている。



修了者からのメッセージ



応用言語研究講座

2026年3月
博士課程修了

何 敏

Outsiderから理論と実践のHinge役へ

2025年度、国際文化研究科の博士後期課程を修了しました。大学職員を経て、現在は福島大学の准教授として働いています。20数年ぶりに学生となって修士課程から研究を始めました。この間、自分がどのような立ち位置で研究や教育に関わればよいのか模索し続けてきました。

今年で来日28年になりますが、私は日本語母語話者ではありません。一方で、若い中国人留学生のように、中国語の感覚が鋭敏なまま保たれているかと問われると、微妙な気がします。英語については、英語教育者・通訳者として活動してきましたが、英語圏で生活した経験はありません。どの言語の母語話者から見ても、私はどこかOutsiderなのではないかと感じてきました。

大学院在学中は、大学職員として働いたかわら、教育実践に関する研究に取り組みました。しかし、教育実践者と研究者のどちらの輪にも入りきれず、どこか浮いているような感覚を抱いていました。ゼミ発表では、研究の方向性や論理の軌道修正で、指導教員の鄭嬌婷先生を困らせる場面が多くありました。こうして博士課程を修了できたのも、サバティカル期間中にもかかわらず、博士論文の執筆を丁寧に指導してくださった鄭先生のおかげです。

博論では、「英語の音節指導が日本人英語学習者のボトムアップ型リスニングスキルに与える影響」をテーマに、英語の音韻指導に関する実践研究を行いました。中国で受けた英語教育と比較し、日本の英語教育では「英語の音」が十分に体系的に指導されていないのではないかという疑問が、研究の出発点でした。

英語の音韻指導は、個々の音を扱う音素レベル(segmental)と、リズムなどを扱う超音素レベル(suprasegmental)に大別されます。しかし、音節はそのどちらにも明確に位置づけられず、教育的な扱いも曖昧になっています。そこで、カテゴリー間に位置する「Outsider」ともいえる音節に焦点を当て、それを軸とした指導の効果を検証しました。その結果、音節指導がsegmentalとsuprasegmentalをつなぐ「Hinge」として機能し、両者を結びつけるとともに、日本人英語学習者のボトムアップ型リスニングスキルの向上にも寄与しうることを示しました。

今後は、これまで培ってきたOutsiderとしての視点を生かし、理論と実践をつなぐHinge役として、教育と実践研究の双方に深く関わっていきたいと思います。



日本宗教・思想史研究講座

2026年3月
博士課程修了

山口 陽子

たくさんのご縁に感謝を！

教員を退職後、私は文学研究科の研究生を経て、2018年に国際文化研究科博士前期課程に入学しました。緑溢れるキャンパスを歩き交う学生たちの姿は、私の眼に眩しく映ったものです。多様性を尊重し、グローバルな研究を推進する東北大学の理念に魅かれ、仙台と地元を往復しながら学びを続けました。仕事を離れて学ぶ日々は、新鮮で知的好奇心を満たす充実した時間でした。同じ志を持つ学生や、さまざまな国からの留学生との交流を通して視野を広げることができ、国内外の先生方による講演では、最先端の研究とともに、そのお人柄にも触れる貴重な機会に恵まれました。また、新型コロナウイルス感染症の影響で学会発表がオンラインとなり、画像や音声が無事に映るか緊張しながら発表したことも、今では懐かしい思い出です。2018年に入学式に参加したゼビオアリーナ仙台は、2026年の学位授与式の頃には建て替えられており、その光景に歩んできた年月の重みを実感しました。厳かな式に参列すると、論文執筆に悩んだ日々が思い起こ

され、博士課程を修了した達成感が込み上げてきました。私が研究の道を歩むことができたのは、多くの方々とのご縁に支えられたからにほかなりません。当初抱いていた「死生観」を探究したいという関心は、研究テーマである「修養」と加藤咄堂の思想・生涯に向き合うなかで、自分なりの答えを見いだせたように感じています。博士論文を提出し、思いがけず総長賞を受賞できたのは、ご指導くださったオリオン・クラウタウ先生、クリントン・ゴダール先生はじめ、ゼミの皆さんのお力添えのおかげです。また、ヤニス・ガイダニディス先生には集中講義などお会いするたびに温かい励ましをいただきました。現在は国際文化研究科GSICSフェローとして、先生方やゼミの皆さんと研鑽を積む機会をいただき、大きな喜びを感じています。

最後に、国際文化研究科で学ぶ学生の皆さんへ心からのエールを送ります。先生方や仲間との出会い、そして築かれるつながりは、かけがいのない財産です。自分の可能性を信じ、それぞれの道を切り拓いていってください。



2026年度科学研究費補助金採択一覧

氏 名	課題番号	研究種目	新・継	研究課題名	備 考
Jeong Hyeonjeong	26H00497	学術変革領域研究(A)	新	Overcoming feelings beyond words: How language shares dynamic states of subjective feelings	
真家 峻	26K00160	基盤研究(B)	新	語彙の自動化が読解力に与える影響の解明:視線計測とfMRIによる統合的検証	
Jeong Hyeonjeong	26K00159	基盤研究(B)	新	言語情報と非言語情報を統合するマルチモーダルな第二言語習得神経モデルの構築	
佐藤 恒徳	26K03466	基盤研究(C)	新	17世紀アリストテレス主義における「先行認識」論の研究	GSICSフェロー
山内 玲	26K03814	基盤研究(C)	新	ラテンアメリカ文学における肉食の表象を巡る研究	
江藤 裕之	26K04109	基盤研究(C)	新	英単語の語源と語構成の知識を活用した語彙学習効果の最大化を目指す英語語彙指導法	
鈴木田 優衣	26K04131	基盤研究(C)	新	単語レベルの発音に基づく英語スピーキング学習モデルの構築と実証研究	GSICSフェロー
市川 真理子	26K03790	基盤研究(C)	新	近代初期イギリス商業演劇における裏方および端役俳優の職務に関する総合的研究	名誉教授
眞子 岳	26K15351	基盤研究(C)	新	バングラデシュにおける小規模廃プラスチック回収業者と製造業者の実態と環境汚染	
吉原 将大	26K06699	基盤研究(C)	新	視覚的単語認知における個人差の解明:研究基盤としての大規模データベース構築と検証	
山口 陽子	26K24090	研究スタート支援	新	近代日本の修養言説における武士道の再編:仏教倫理・ジェンダーの視点から	GSICSフェロー
一木 優花	26KJ0544	特別研究員奨励費	新	米国における公民権運動の人種的多様性とその記憶:日系人活動家の事例	特別研究員
Yan Jiaxin	26KJ0602	特別研究員奨励費	新	比喩的ジェスチャーの神経基盤と言語習得への影響	特別研究員
岩渕 俊樹	25K06449	基盤研究(C)	継	自閉スペクトラム症者における孤独感の慢性化が社会的動機付けに対して及ぼす影響	
ガイタニディス ヤニス	25K03582	基盤研究(C)	継	現代日本の消費者法における「宗教」と「不安」―「靈感商法」の法対策を中心に―	
小室 竜也	25KJ0018	特別研究員奨励費	継	脳イメージングを用いた言語的性と学習の相互作用の検討	特別研究員
木村 悠之介	25KJ0023	特別研究員奨励費	継	近代日本における「宗教」としての神道と地域社会―メディア史の観点を中心に―	特別研究員
Flood Victoria Anne	25KJ0577	特別研究員奨励費	継	第二言語談話理解における韻律と文脈統合の脳内メカニズムの解明	特別研究員
黒川 皐月	25KJ0607	特別研究員奨励費	継	第二言語音韻表象が語彙の習得および知識表象に与える影響の解明	特別研究員
Huang Qiang	25KJ0635	特別研究員奨励費	継	バイリンガルの文生成における構文は独立か共有か:fMRI研究	特別研究員
青木 俊明	25K01338	基盤研究(B)	継	Digital Native時代に求められる地方中核都市の中心市街地像:QOLからのアプローチ	
鈴木 道男	25K04008	基盤研究(C)	継	戦後東欧ディアスポラ文学の戦争表象と本国におけるその受容と摩擦―憎悪の受容史―	名誉教授
佐藤 正弘	25K05330	基盤研究(C)	継	大規模言語モデルに基づくマルチエージェント・システムを活用したイノベーション分析	
大窪 和明	25K07962	基盤研究(C)	継	人口減少に対応する分布的ロバスト二段階確率最適化を用いた事前復興計画モデルの開発	

2026年9月30日現在

氏 名	課題番号名	研究種目	新・継	研究課題名	備 考
劉 庭秀	25K15606	基盤研究(C)	継	東アジア・東南アジア地域における廃プラスチック問題の課題導出と国際比較分析	
繁田 真爾	25K16093	若手研究	継	「悪」の統治をめぐる近現代日本の比較思想史的研究—監獄・死刑・宗教教誨—	GSICSフェロー
Gong Liwei	25K16278	若手研究	継	The Grammaticalization of Shuo1 as a Complementizer in Standard Mandarin Chinese: Insights from a Large-Scale Podcast Corpus	GSICSフェロー
小室 竜也	25K16344	若手研究	継	分野横断型アプローチによる英語冠詞の文法テストの妥当性検証	特別研究員
大澤 絢子	24K15910	若手研究	継	近代日本における女性の修養と模範的人物像に関する総合的研究	GSICSフェロー
常本 亜希	24K16144	若手研究	継	What characterizes comprehensible speech for Japanese university students learning English?	
Goto Corinna V.	24K04027	基盤研究(C)	継	Analyzing and Categorizing Manga and Children's Books for Extensive Reading in German	GSICSフェロー
小原 豊志	24K04298	基盤研究(C)	継	デモクラシーの「飼いならし」—初期アメリカにおける反ポピュリズムの言説構築と実践	
内原 卓海	24K00080	基盤研究(B)	継	偶発的語彙習得の神経基盤の解明:脳イメージングによる文脈類推学習効果の検証	
朱 琳	24K04281	基盤研究(C)	継	清末民国初期の日本人居留民社会に関する総合的研究:北京・天津を中心として	
クラウタウ オリオン	24K03414	基盤研究(C)	継	憲法作者としての聖徳太子:その表象の思想史的研究	
佐藤 透	24K03352	基盤研究(C)	継	心の一人称的特性と心身問題—間主観的構成論から見た心身の相関—	
高橋 大厚	24K03833	基盤研究(C)	継	節の省略の比較統語論研究	
中山 真里子	24K06615	基盤研究(C)	継	中日バイリンガル(Logographic Bilinguals)の心的辞書における音韻表象の解明	
ジスク マシュー	24K03860	基盤研究(C)	継	A Comparative Study of the Influence of Glossing on the Historical Development of Japanese and the Languages of Europe	
真家 峻	24K16124	若手研究	継	認知神経科学アプローチからの外国語習得におけるスキル習得のメカニズムの解明	
佐藤 恒徳	23K00086	基盤研究(C)	継	クリスティアン・ヴォルフ『第一哲学即ち存在論』の存在論の研究	GSICSフェロー
岡田 毅	23K00765	基盤研究(C)	継	翻訳支援ツールを活用した学術英語ライティング能力の段階別育成手法の研究と開発	名誉教授
妙木 忍	23K11671	基盤研究(C)	継	女性のライフコース選択を支えた地域社会の実証的研究—日本の芸者文化を事例として—	
鈴木田 優衣	23K12237	若手研究	継	日本人英語学習者を対象としたスピーキング学習促進のための語彙の調査	GSICSフェロー
大河原 知樹	23K25445	基盤研究(B)	継	中東における協働・共有の法制と実態:組合と財産共有	
鈴木 美津子	23K00349	基盤研究(C)	継	ロマン主義時代の文学作品に見られるアメリカ表象	名誉教授
山下 博司	22K00068	基盤研究(C)	継	マレー半島南半の複合社会における宗教の多元的共存と包摂的共生秩序の研究	名誉教授
山下 博司	22KK0001	国際共同研究 加速基金 (国際共同研究(B))	継	アジア多文化社会におけるエスニシティと宗教間宥和—日本の移民問題等も視野に	名誉教授



キャリア講習会

2025年11月19日、本研究科において令和7年度キャリア講習会「研究の道を共に歩むために——大学院・コロナ禍・就職を通して考えたこと」が開催されました。

登壇したのは本研究科の修了生で、現在は石巻専修大学助教の阿部純氏です。第二次大戦後の日系アメリカ人史研究で高い評価を受ける阿部氏は、博士課程在籍中にコロナ禍に直面し、海外調査の中断など多くの困難を経験しました。しかし、その逆境を資料の徹底的な精読やオンラインでの国際ネットワーク構築の機会へと転換し、研究を昇華させました。

講演で阿部氏は、進路に悩む現役生に対し、孤独な思考の果てには必ず理解してくれる他者が存在すると強調し、試行錯誤の道のりは無駄ではなく、必要不可欠な「豊かな迂回路」であると力強く肯定しました。

最後に、阿部氏は厳しい社会状況下でも共に研究の道を歩み続けるための連帯を呼びかけ、次代の若き研究者へエールを送りました。本講習会は、キャリアパスに不安を抱く学生にとって、今後の指針となる有益な機会となりました。

(小原豊志)

公開講座

2025年11月15日、研究科主催第31回公開講座「効果的な英単語学習法とは？」が開催されました。前半は、内原卓海准教授による、第二言語習得研究の知見に基づいた、高頻度語の優先的学習や想起練習、分散練習、交互練習、望ましい困難、高変動音声訓練(HVPT)など、効果的な語彙学習法について講演がありました。続いて、実践編として、真家峻講師による語彙知識の構成要素や学習成果を高める練習方法について解説がありました。世界的に活躍されている新進気鋭の若手研究者による、応用言語学、第二言語習得分野における最新の研究成果を交えながらのお話により、語彙学習に関する理論的背景と具体的な実践方法の双方について理解を深めることができ、英語教育および生涯学習に資する有意義な講座となりました。参加者からは実践的でわかりやすいとの評価が多く寄せられ、語彙学習に関する理解を深める有意義な機会となりました。(江藤裕之)

入試説明会

2026年6月12日、国際文化研究科オンライン入試説明会を開催しました。申込者は30名で、当日は15名が参加しました。はじめに、入試実施委員長が東北大学と本研究科の特色や入試制度について説明し、続いて在学生在が、受験準備や研究活動、大学院生活について、自身の経験を交えながら紹介しました。

今年度は、入試の勉強方法や出願手続きに加え、指導希望教員への連絡方法、研究生と大学院入試への出願、博士後期課程の経済支援、在学中の留学や実習、修了後の進路など、入学前から修了後までを見通した幅広い質問が寄せられました。これらの質問には、説明会当日および教務係からのメールを通じて回答しました。アンケートでは、回答者全員が説明会を「役に立った」と評価し、「研究科全体について理解を深めることができた」「先生や先輩の話を聞き、ここで研究したいという思いが強まった」といった感想が寄せられました。また、回答者の多くが研究科ウェブサイトを通じて説明会を知ったことから、オンラインでの情報発信の重要性も改めて確認できました。講座ごとの特色や研究内容をより詳しく知りたいとの提案もあり、今後の説明会の充実に生かしていきたいと考えています。最後に、説明会の準備と運営にご尽力くださった教務係の皆様、そして自身の経験を率直に伝えてくださった学生の皆さんに、心より御礼申し上げます。(鄭 嬌婷)



入学を希望される皆様へ

春季入学試験は

令和9(2027)年2月9日(火)、10日(水)に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。

なお、上記の入学試験の詳細については、本研究科ホームページをご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先

東北大学国際文化研究科 教務係
TEL: 022-795-7556
E-mail: int-kkdk@grp.tohoku.ac.jp